



明化の教育

5月号(第456号)
平成30年4月27日
文京区立明化小学校
校長 溝畑 直樹

明化が目指す授業のかたち

校長 溝畑 直樹

先日、校内の研究会に國學院大学教授の田村 学(たむら まなぶ)先生を講師としてお招きしました。田村先生は公立小学校の教員の他、教育委員会や文部科学省でお仕事をされたご経験もあり、現代の教育事情に最も精通されている、まさに日本教育界のフロントランナーともいえる先生です。

【子供から発信されるものを大切にする授業】

田村先生によれば、本校が目指している「子供を学びの主体者とする授業」とは「子供のOUTPUT(表出・発信)を重視した授業」となります。逆に「教師が主体者となる授業」とは、「教師のINPUT(講義、伝達)を重視した授業」となります。かつて私が受けた授業は、ほとんどがこちらのスタイルでした。時々には勇気を出して挙手してみるのですが、指名されなければ、45分間一度も発言しないまま終わることは何度もありました。先生の話聞き、黒板に書かれたことを間違えずにノートに写す。毎日が、その繰り返し。そのうち挙手することも少なくなり、できれば指名しないでほしいと、なるべく先生と目を合わせぬよう、目立たぬよう…。

【子供が発信できるように導くことこそ教師の役割】

話をただ聞いているだけの時、子供の脳の働きは、眠っている時とほぼ同じなのだそうです。授業中に眠くなるのも道理です。本校が、子供を主体者とするものに授業を変えていくことを始めた時、教師の最も大切な役割も変わりました。私たちは、「知識を正しく子供に伝えること」ではなく、「子供に主体的に考えさせ、その結果、子供が新たな意見や活動を生み出すよう導くこと」に力を注ごうとしています。

地域のレストランからいただいた卵パックを活用した誘導装置を使うゲストとそれを見つめる子供たち

【本校が目指す子供の姿…主体的・協働的に学ぶ姿】

昨年度、4年生が視覚障害者について学んだ時のことです。視覚障害者が町で安心・安全に暮らすための工夫(点字ブロックなど)を学んだあと、地域にお住まいの視覚障害者を学校にお招きすることになりました。ここから子供たちのOUTPUTが始まります。あるグループは、点字ブロックからヒントを得て卵パックを玄関から4年教室までの壁に貼り付け、ゲストが卵パックに触れながら歩けば、校内を誘導できる装置を作りました。また別のグループは女性ゲストを確実に女性用トイレに誘導するため、女性トイレから「よい香り」を漂わせ「よい香りのする方が女性用トイレです」と音声案内も同時に流しました。その他、手触りだけで楽しめるオセロゲーム、音の出るボーリング等々、子供が自分の意見をグループの中で出し合い、どんどん形にしていく様子は素晴らしく主体的で協働的な学びの姿でした。それは、本校が授業を通して育てたい子供の姿のモデルともなりました。



【よい授業には必ず予期せぬ学びがある】

そんな授業には、サプライズのご褒美がちゃんとつきます。それは、卵パックの装置を実際に使ったゲストが「壁に貼るのは良いアイデア。でも、大人の私はちょうど良い高さで触れることができるけれど、小さい子には高すぎないかしら。」とおっしゃったことです。その言葉から子供は気付くのです。「そうか! だから点字ブロックは高さの調節が必要ない一番低いところ(地面)にあるのだ!」と。それは、身の回りのものをもう一度見直すきっかけになると共に、「誰にとっても」という人権の根幹にかかわるものの考え方にまで子供たちを導いていきました。

12月には、授業改善の成果を研究発表します。これからの本校の授業にどうぞご期待ください。